梅雜載

津城、距梅溪殆二日程、久願游而未能也、庚寅二月十八日、與宮崎子達子、淵子、山下直介、如伊州、遂往游焉、上野人服部文稼、深井士發等爲導、美濃梁公圖、及其妻張氏、遠江福田半香亦來會、未下出城門、行一里餘、爲白樫、山谷間已多梅花、漸入佳境、又半里弱、爲石打、又行未一里、尾山在目、爲之躍然、至則遍地皆花、余初恐逢花期、見之心降、入憩三學院、約宿而出往觀一目千本、梅溪之賞始於是矣、

記二

一目千本、尾山八谷之一也、花最饒、故有此名、蓋比芳野櫻谷云、余與同人出院下前崖、覺山水與梅花皆已佳絕、任意而行、至一大谷、文稼識而言之、徑詰曲而上、花夾之、步出其間、如箔白雲而行、數百步達巔、下顧彌望皓然、與谿山相輝映、余嘗遊芳野、觀其一目千本、有此盛而無此勝、又嘗觀嵐山櫻花、有此勝而無此盛也、更求之西土、以梅花名者、抗之孤山、境蓋幽花則寥々、蘇之鄧尉花頗多、地則熱鬧、唯羅浮梅花村、對峻峯、臨寒溪、而花尤饒、庶幾可比我梅溪歟、日已斂昏、花隱淡煙中、千樹依約不見其所極、暗香翁勃襲人、聞溪聲益近、且大至咫尺不辨色、而後去、○中略

文政庚寅仲春　伊勢拙堂居士齋藤謙

〔武江產物志遊觀〕梅　本所梅屋敷（龜戸寺島、立春より三十四五日目に開く、）臥龍梅（龜戸、同時、）杉田の梅（神奈川、立春より廿五日頃開、）蒲田梅（大森、立春より三十日位、）龍戸天神境内　難波梅（淺草自性院、）籠の梅（はしば法源寺、）鶯宿梅（高田南藏院、）御殿址の梅（高田南藏院、）茅野の梅（增上寺山内、）榮の梅（牛込宗參寺、）

〔泊洦筆記〕一ある時、縣居翁の家に文會ありて、梅の詞を人々にもつくらせ、翁もつくられたりけるに、翁の文きはめて梅をそしりて、梅はから國よりつたはれるものにして、いとふるくは歌にもよめることなく、寧樂朝に至りて、大伴卿家に人々をつどへて、梅の花の宴せられし三十餘首のうた、萬葉に見えたるがはじめなり、枝さしこわ〳〵しく、冬のうちより、我はがほに咲き出でてかしこがりたるさま、櫻のわが皇國におひそめて、にほひやかなるにはいたくおとれりと、口